

## その友となるために

長谷川和子

三が日過ぎた頃、用件を言わぬ銀行員の電話が入るようになった。不信に思う私に夫も思い当たらない様子であった。やがてその謎は解けた。退職を強要され既に辞職した会社の連帯保証人に夫の名前と押印が……。滞納した社長への請求がまわってきたのだ。月五〇万円の支払いは到底無理なこと。降って沸いた出来事に慌てふためき成す術を知らない私は夫を詰った。「会社を助けるために仕方なかった」と社長のことを決して悪く言わない。数年前より我が家の通帳から建材購入や職人の賃金を支払っていたことが、脳裏をかすめた。その額五五〇万円。私の怒りは頂点に達した。

上司から「別居」をした方が良いと言われ、終業後冬風突き刺す雪道をバイクで走るのは危険が伴ったが、安アパート捜しに奮走した。

数日後の夜半、若干の生活用品を車に積み、娘の運転で夫は居を移した。寒空の星の輝きが一段と暗闇を明るく包んでいた。近所の目を、見送る息子と私は意識していた。苦難の門出である。

今日まで父の酒乱、幾多の病い、十数回の手術等の試練は神の御心として受容できた。だが、今回は違っていた。すでにこの世に存在しない会社の債務を、「なぜ一市民が負わねばならないのか」納得いかなかった。眠れぬ日が続き正に狂人化寸前、気が付けば利子が五百万円に増えていた。(何とかせねば)一括払いをすると利子免除となると聞き、貸手捜しに私は邁進せざるを得なかった。

「協力しましょう」と言って下さった方の中に、神の存在を見た思いであった。

何故の患難なのか、応えを見出せぬまま十年の月日が流れた。「その人の友とならんがために……」、借金地獄という十字架を背負った人々の苦悩を理解するために、神は私を用いられたのだ……。やっと思えるようになった。夫の収入は借金返済に、子供達の協力を得て私の薄給で暮らしてきた。今ようやく一筋の光が見えはじめたのである。